ばかりの時分であった。 私は十七になった。そして中学校から高等学校へはいった

れつつあった。れによって、私の少年時からの脱皮は、気味悪いまでに促されによって、私の少年時からの脱皮は、気味悪いまでに促さ私の性格にいちじるしい影響を与えずにはおかなかった。そ恐れて、私をそこの寄宿舎に入れた。そういう環境の変化は、私の両親は、私が彼等の許であんまり神経質に育つことを

独逸語の勉強をしていたり、或だてが もつかず、 えていない頬にこわごわ剃刀をあてたりした。 はずれにされないように、苦しげに煙草をふかし、 クとか、 は云うものの、 十人余りの生徒等が一しょくたに生きていた。それに部屋と 屋に分れ ていた。私は彼等の中で一番小さかった。 つ置いてあるきりだった。そしてその卓の上には誰のものと インク壺とか、煙草の袋とか、それらのものがごっ ていた。そしてその一つ一つの部屋には、 ぶなっかしそうに馬乗りになって煙草ば 白筋のはいった制帽とか、 あたかも蜂 中にはただ、穴だらけの、大きな。卓が二つ三 の巣のように、いくつも 或る者は足のこわれかかった古 そんなものの中で、或る者は 辞書とか、ノオトブッ ふかし、まだ髭の生私は彼等から仲間 かり吹かし の それぞれ 小さい 部

にまで入ってきて、まだ現実では私の見知らない感覚を、そは私をむかつかせた。私が眠ると、そのにおいは私の夢の中二階の寝室はへんに臭かった。その汚れた下着類のにおい

行った。 の夢に与えた。私はしかし、そのにおいにもだんだん慣れて

だ最後の一撃だけが残されていた……こうして私の脱皮はすでに用意されつつあった。そしてた

ている、 ちに、 て、なんだかめ らない花が一せいに、 るようにも見えた。 花へ持っていくか、見ていてやろうと思ったのである。 って、一匹の蜜蜂の飛び立つのを見つけたのだ。そこで、ている、私の名前を知らない真白な花から、花粉まみれに してあたかもそれらの花のどれを選ん の蜜蜂がその足にくっついている花粉の塊りを、 南側にある、 めたような気がした。 し、そいつはどの花にもなかなか止まりそうもなかった。 或る日 私はふと足を止めた。そこ の昼休みに、私は一人でぶらぶらと、 ひっそりした花壇のなかを歩いていた。そのう いめ ……その瞬間だった。 ίì の雌蕋を妙な姿態にくねらせるのを認その蜜蜂を自分のところへ誘おうとし の 一 隅に だらいいかと迷ってい 私はそれらの見知 炭がりながら咲い 花粉まみれにな 植物実験室 今度はどの しか そ の

の、その花をいきなり毮りとった。そしてじいっと、他の花子供のような残酷な気持になって、いま受精を終ったばかり からも飛び立っていった。 その小さな柱頭にしがみつきながら。やがてその蜜蜂は は私はそれを私 の花粉を浴びている、 れにぶらさがるようにして止まった。その花粉 ……そのうちに、とうとうその蜜蜂は或る花を選 [の掌で揉みくちゃにしてしまった。、いる、その柱頭に見入っていたが、 私はそれを見ると、 なんだか急に まみ それ で、 んで、 れ しまいに の それ

名前を呼ぶものがあった。見ると、それは魚住と云う上級生をなして面している植物実験室の中から、硝子戸ごしに私のる花壇のなかをぶらついていた。その時、その花壇にT字形 私はなおも、さまざまな燃えるような紅や紫の花の咲いてい

「来て見たまえ。顕微鏡を見せてやろう……」

であった。

室のなかへ這入っていった。私はそういう彼の気に入りたいと思った。 きの一つの、「円盤投手」と云うのに少し似ていた。そしその頃私たちの間に流行していた希臘彫刻の独逸製の絵はが 向っても、 てそれが下級生たちに彼を偶像化させていた。が、彼は誰に 盤投げの選手をしていた。 グラウンドに出ているときの彼 その魚住と云う上級生は、 何時も人を馬鹿にしたような表情を浮べていた。 私の倍もあるような大男で、円 私はその植物実験

きどきツァイスの顕微鏡でそれを覗いていた。それからそれ不器用そうに何かのプレパラアトをつくっていた。そしてと ように折り曲げていなければならなかった。 を私にも覗かせた。私はそれを見るためには、 そこには魚住ひとりしかいなかった。彼は毛ぶかい手で、 身体を海老のそれからそれ

| ええ……」

見えるか?」

それとも彼が何時もの仮面をぬいでいるせいか、彼の頬の肉 に気づいていた。そこの実験室の中の明るい光線のせいか、 方の、顕微鏡を見ていない っていた。すこし前から私は彼の顔が異様に変化しだしたの 私はそういうぎごちない姿勢を続けながら、しかしもう一 、眼でもって、そっと魚住の動作を 窺ット

つかなかった。

寝室は毎夜、

規定の就眠時間の十時にならなければ電燈が それだのに彼は九時頃から寝室へ行ってしま

と見知らない真白な花のことを思い出した。 口許にはたえず少女のような弱弱しい微笑をちらつかせていは妙にたるんでいて、その眼は真赤に充血していた。そして 。 私は何とはなしに、今のさっき見たばかりの一匹 彼の熱い呼吸が |の蜜蜂

私の頬にかかって来た……

私はついと顕微鏡から顔を上げた。

云った。 「もう、 僕……」と腕時計を見ながら、 私は口ごもるように

「教室へ行かなくっちゃ……」

ーそうか」

生の、人を馬鹿にしたような表情を浮べていた。 ていくぶん青くなっている私の顔を見下ろしながら、 いつのまにか魚住は巧妙に新しい仮面をつけてい た。 彼は平

* **

った。 彼は瘠せた、 が上級生たちから少年視されていたことはかなり有名だった。 が他から転室してきた。彼は私より一つだけ年上だった。彼 のほっそりした頸を偸み見ているようなことさえあった。 の美しさを羨んだ。 五月になってから、 夜、三枝は誰よりも先に、二階の寝室へ行った。 まだ薔薇いろの頬の所有者、私は彼のそういう貧血性児せた、静脈の透いて見えるような美しい皮膚の少年だ 私は教室で、 私たちの部屋に三枝と云う私 屡、教科書の蔭から、彼い、私は彼のそういう貧血性 の同級生

いろんな風に夢みた。 うのだった。私はそんな闇のなかで眠っている彼の寝顔を、

こい。こ。 しかし私は習慣から十二時頃にならなければ寝室へは行か

或る夜、私は喉が痛かった。私はすこし熱があるように足なかった。

は、ただ蝋燭の光りの気まぐれな動揺のせいらしかった。何故それは一瞬間に過ぎなかった。私がその天井に見出した幻影 た蝋燭が、突然、大きな鳥のような恰好をした異様な影を、のドアを開けた。そのなかは真暗だったが、私の手にしてこ ただ、三枝が壁ぎわの寝床に寝ているほか、その 枕 もとに、 なら、 その天井に投げた。それは格闘か何んかしているように、 と不機嫌そうに坐っているのを見たきりであったから…… もうひとりの大きな男が、マントをかぶったまま、むっつり 気味に、揺れ動いていた。 にして階段を昇って行った。そして何の気なしに自分の寝室 った。私は三枝が寝室へ行ってから間もなく、西洋蝋燭を手 私の蝋燭の光りがそれほど揺れなくなった時分には、 かった。 私の心臓はどきどきした。…… 私はすこし熱があるように思 私の手にしてい が、 無

枝の隣りの、自分のうす汚れた蒲団の中にもぐり込んだ。僧んでいるにちがいないと信じていた。私は黙ったまま、三たからだった。私はいつかの植物実験室の時から、彼が私を私は惶てて私の蝋燭を消した。それが魚住らしいのを認め「誰だ?」とそのマントをかぶった男が私の方をふりむいた。

三枝もさっきから黙っているらしかった。

中で荒あらしい音を立てながら、寝室を出て行った。その足らしい男はとうとう立上った。そして何も云わずに暗がりの私の悪い喉をしめつけるような数分間が過ぎた。その魚住

音が遠のくと、私は三枝に、

「呉はこい)」と、しいこ。「僕は喉が痛いんだ……」とすこし具合が悪そうに云った。

「熱はないの?」彼が訊いた

「すこしあるらしいんだ」

「どれ、見せたまえ……」

気づかれはしまいかと、そればかり心配していた……た。それだのに私は、自分の脈、搏の急に高くなったのを彼に私の脈を見るのにしては、それは少しへんてこな握り方だった。私は息をつめていた。それから彼は私の手頸を握った。して、私のずきずきする顳顬の上に彼の冷たい手をあてがっそう云いながら三枝は自分の蒲団からすこし身体をのり出

数日後、夕方から私の喉がまた痛みだした。私はわざと咳なければいいとさえ思っていた。晩早く寝室へ来られるため、私の喉の痛みが何時までも癒ら翌日、私は一日中寝床の中にもぐりながら、これからも毎

床はからっぽだった。何処へ行ってしまったのか、をしながら、三枝のすぐ後から寝室に行った。しか

しかし、彼の

彼はなか

身もだえしている彼の姿を、 をつけぱなしにしておいた。 自分の喉がひどく悪いように思い、ひょっとしたら自分はこ つかの晩の幻を思い浮べた。 の病気で死んでしまうかも知れないなぞと考えたりしていた。 なか帰って来なかった。 彼はやっと帰 一時間ば かり過ぎた。 って来た。 私は 私はさっきから自分の枕許に蝋燭 私は彼に今まで何処へ行ってい 天井に無気味に映した。私はい その光りが、服をぬごうとして ひとりで苦しがってい た。 私は

云い方だった。が、私はなんにも云わずにいた。一人で散歩して来たのだと答えた。それはいかにも嘘らしいたのかと訊いた。彼は眠れそうもなかったからグラウンドを

「蝋燭はつけておくのかい?」彼が訊いた。

「どっちでもいいよ」

「じゃ、消すよ……」

そうに感ぜられた。私の火のようにほてった頬には、それが神々しいくらい冷た燭の光りでちらちらしている彼の頬を、じっと見あげていた。燭を私の顔に近づけてきた。私は、その長い睫毛のかげが蝋のもう云いながら、彼は私の枕許の蝋燭を消すために、彼の

盤投げをしているのが、見かけられるようになった。になり、時々グラウンドに出ては、ひとりで狂人のように円れ、その一方では、魚住がますます寄宿生たちに対して乱暴うに見えた。しかしそのように三枝が私に近づいてくるにつ私と三枝との関係は、いつしか友情の限界を超え出したよ

れについては口をつぐんでいた。 消してしまったことを私たちは知った。しかし私たちは、そ備をし出した。魚住がその試験を前にして、寄宿舎から姿を善そのうちに学期試験が近づいてきた。寄宿生たちはその準

* **

夏休みになった。

私は三枝と一週間ばかりの予定で、或る半島へ旅行しよう

としていた。

て悪戯かなんかしようとしている子供らのように、いくぶん或るどんよりと曇った午前、私たちはまるで両親をだまし

陰気になりながら、出発した。

になった脊中に、一ところだけ脊骨が妙な具合に突起していりで、寝床へ入ろうとしてシャツをぬいでいる、三枝の裸かがランプをもって入ってきた、私はそのうす暗いランプの光暗くなると、何処からともなく海草の香りがしてきた。少婢れた、或る小さな漁村に到着した。宿屋はもの悲しかった。 岸に沿うた道を歩いた後、。鋸のような形をした山にいだかよたちはその半島の或る駅で下り、そこから二里ばかり海

そして私はそこのところへ指をつけながら、

「これは何だい?」と訊いてみた。

るのを見つけた。私は何だかそれがいじってみたくなった。

脊椎カリエスの痕なんだ」 『それかい……』彼は少し顔を赧らめながら云った。 「それは

「ちょっといじらせない?」「わっといじらせない?」

目をつぶりながら、なんだか擽ったそうにしていた。な突起を、象牙でもいじるように、何度も撫でてみた。彼はそう云って、私は彼を裸かにさせたまま、その脊骨のへん

そうな暗い空合になった。それに私たちはもう歩きつかれ、の一つに近づこうとした時分になると、今にも雨が降って来いくつか小さい村を通り過ぎた。だが、正午頃、それらの村した。そして再び海岸に沿うた小石の多い道を歩きだした。翌日もまたどんよりと曇っていた。それでも私たちは出発

いた。 互にすこし不機嫌になっていた。私たちはその村へ入ったら、 いつ頃乗合馬車がその村を通るかを、 尋ねてみようと思って

を止めた。そして私たちの方を珍らしそうに見つめていた。ていた。私たちが近づくのを見ると、彼女たちはしゃべるの めいめいに魚籠をさげながら、立ったままで、何かしゃべっ その村へ入ろうとするところに、一つの小さな板橋がかか

私はそれらの少女たちの中から、一人の眼つきの美しい少女

一ことでもいいから何か言葉を交わしたいと思いながら、しようとして、さまざまな動作を工夫した。そして私は彼女と 彼が私に先廻りしてその少女に馬車のことを尋ねようとして いるらしいのを認めた。 へずかずかと近づいて行った。 のとき突然、三枝が歩みを弛めた。そして彼はその少女の方 かしそれも出来ずに、彼女のそばを離れようとしていた。 短い時間のうちに出来るだけ自分を強くその少女に印象させ 無作法に見つめても、平気で私に見られるがままになってい たちの中では一番年上らしかった。そして彼女は私がい を選びだすと、その少女ばかりじっと見つめた。彼女は少女 そんな場合にあらゆる若者がするであろうように、 私も思わず立ち止りながら、 私は くら

そ

の発着所へ向った。そこへ着いてからも馬車はなかなか来な

そのうちに雨が降ってきた。

私たちは黙りあって、その村はずれにあるという乗合馬

している間、 そこで私もまた、その少女に近づいて行きながら、 方が私よりも一そう強く印象されはすまいかと気づかった。 少女はすこしも羞かまずに彼に答えていた。 私はそういう彼の機敏な行為によってその少女の心に彼の 彼女の魚籠の中をのぞいていた。 彼女の声は、 彼が質問

> が、その声がわりのしているらしい少女の声は、 彼女の美しい眼つきを裏切るような、妙に咳枯れた声だった。 かえって私

をふしぎに魅惑した。

という魚かと尋ねた。 でいた魚籠を指さしながら、 今度は私が質問する番だった。私はさっきからのぞき込ん おずおずと、 その小さな魚は何

き私は、 笑しかったものと見える。 れて、他の少女たちもどっと笑った。よほど私の問い方が可 のを認めた。 少女はさも可笑しくって溜らないように笑った。それ 三枝の顔にも、 ちらりと意地悪そうな微笑の浮んだ 私は思わず顔を赧らめた。そのと

私は突然、 彼に一種の敵意のようなものを感じ出した。

だした。 たちの中に前夜の私たちを、蘇、らせた。 私たちは 漸く打解け のかすかな香り、同じようなランプの仄あかりが、僅かに私 この宿屋も前日のうす 汚 い宿屋に似ていた。同じような海草 ような雨 空いていた馬車の中でも、私たちは殆んど無言だった。そかった。そのうちに雨が降ってきた。 して互に相手を不機嫌にさせ合っていた。夕方、やっと霧の 私たちは私たちの不機嫌を、旅先きで悪天候ばかり の中を、 宿屋のあるという或る海岸町に着いた。そ

明日汽車の出る町まで馬車で一直線に行って、ひと先ず東京 を気にしているせいにしようとした。そしてしまいに私は、

車

に同意した。に帰ろうではないかと云い出した。彼も仕方なさそうにそれ

まだ私の耳についていた。三枝がかすかに歯ぎしりをした。をさげた少女の美しい眼つきを思い浮べた。その異様な声は起を確めると、昨夜のようにそれをそっと撫でてみた。私は明け方近く、私はふと目をさました。三枝は私の方に脊なからの夜は疲れていたので、私たちはすぐに寝入った。……

た。それが私たちに旅行を中止することを否応なく決心させ、翌日も雨が降っていた。それは昨日より一そう霧に似てい私はそれを聞きながら、またうとうとと眠り出した……

でいた。 でいた

見た。彼は雨でぐっしょり濡れた硝子窓に顔をくっつけて、き出しながら、何度も振りかえって汽車の中にいる彼の方を駅で汽車から下りた。私は混雑したプラットフォムの上を歩はその方が便利な郊外電車に乗り換えるために、或る途中の別れの時はもっとも悲しかった。私は、自分の家へ帰るに

硝子を白く曇らせ、そしてますます私の方を見えなくさせて私の方をよく見ようとしながら、かえって自分の呼吸でその

.

いた。

カリエスが再発したらしかった。が、それにも私は遂に手紙の最近の手紙によって彼が病気になったことを知った。脊椎た。すでに少女らの異様な声が私の愛を変えていた。私は彼をよこした。しかし私はだんだんそれに返事を出さなくなっその湖畔に滞在中の私に、まるでラヴ・レタアのような手紙行した。そして私はその後、三枝には会わなかった。彼は、屡、、八月になると、私は私の父と一しょに信州の或る湖畔へ旅

やりと見つめていた。 を見出した。私はそれを未知の人でもあるかのように、ぼんている朝、私は校内の掲示板に三枝の死が報じられてあるのようにしか見なかった。……冬になった。或る薄氷りの張っどこかの海岸へ転地していた。魚住はもはや私を空気を見るどこかの新学期になった。湖畔から帰ってくると、私は再び寄入りと見つめていた。河畔から帰ってくると、私は再び寄

4

それから数年が過ぎた。

その数年の間に私はときどきその寄宿舎のことを思い出し

を出さずにしまった。

を余りにも愛していたので、 数年の間 た。そして私は其処に、私の少年時の美しい皮膚を、丁度灌木 しめないものはなく、 出会ったことか! く脱いできたような気がしてならなかった。 の枝に ひっかかっている蛇の透明な皮のように、 に、 私はまあ何んと多くの異様な声をした少女らに が、それらの少女らは一人として私を苦 それに私は彼女らのために苦しむこと そのために私はとうとう取りか ――そしてその 惜し しげもな

そして 光浴をやっていた。 うにした。 るようになった。或る時、 にあって、毎日数時間ずつヴェランダに出ては、 ついた。その時から、 いことを知ると、その少年はときどき私 その少年は脊椎カリエス患者だったが、もうすっかり恢復期 死んだ三枝の 唇だけがほのかに紅い色をしている細面の顔の下ーヘテシッッ゚になった。或る時、私はその少年の日に黒く焼けた、 顔が透かしのように現われている 私が私のベッドに寝たきりで起きられな 私はなるべくその少年の顔を見ない の病室に見舞 せっせと日 のに気が 顔の下か ĺί にく

或る朝、私はふとベッドから起き上って、こわごわ一人で、

ò じような特有な突起のあるらしいのが、 が目を細くして見ると、彼の真黒な脊なかにも、 く打った。そしてそれをもっとよく見ようとして、 見られていないと信じているらしかった。私の心臓 日光浴をしているのを見つけた。彼は少し前屈みになりながのヴェランダに、その少年が猿股もはかずに素っ裸になって持のいい朝だった。私はそのとき自分の病室の窓から、向う 窓際まで歩いて行ってみたい気になった。それほどそれは気 私は不意に目まいを感じながら、やっとのことでベッドま 一自分の体の或る部分をじっと見入っていた。 私の眼に入った。 三枝の 彼は 近眼 はは 誰 と同 げし にも の 私

- ^ 三は女子を、皮がないをごしてで帰り、そしてその上へ打つ伏せになった。

も気がつかずに、退院した。 とな打撃については少しが年は数日後、彼が私に与えた大きな打撃については少し